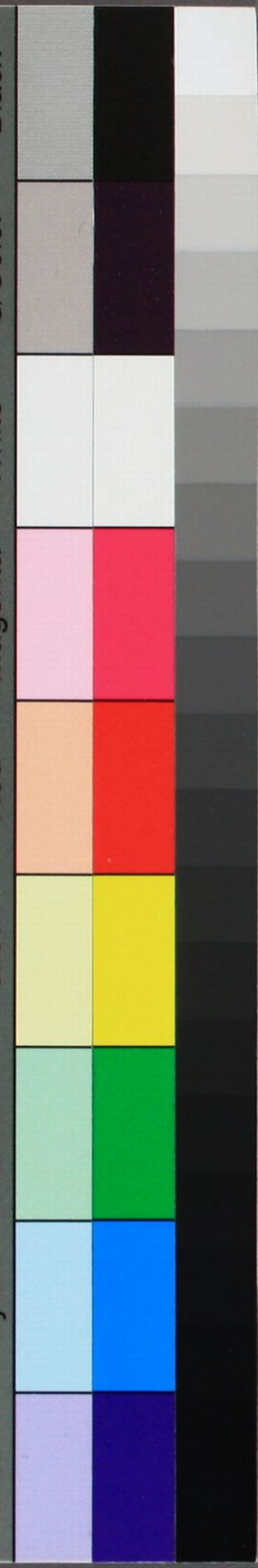


中村憲吉著

アララギ叢書
第六十四篇

歌集
輕雷集以後

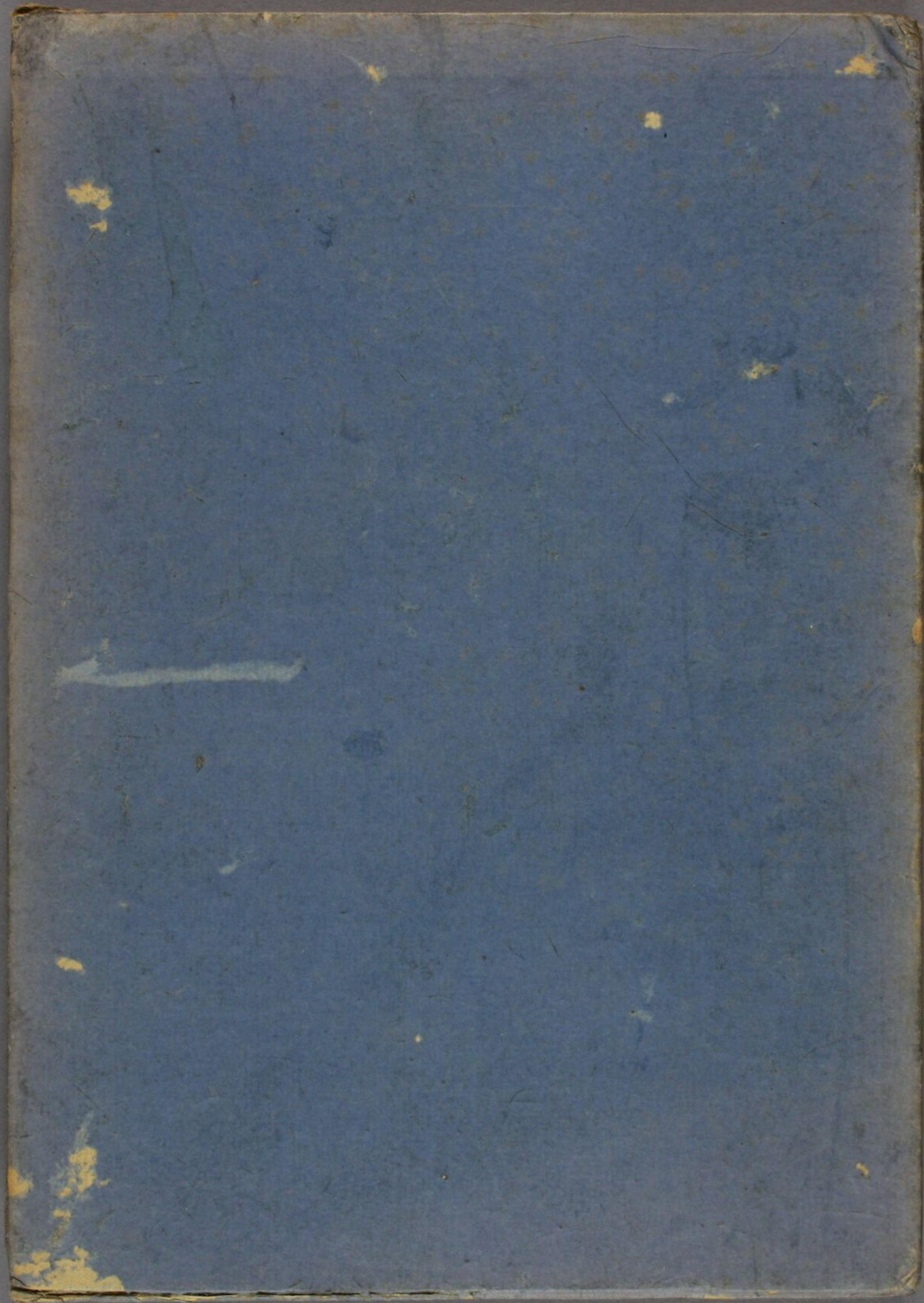
岩波書店刊行

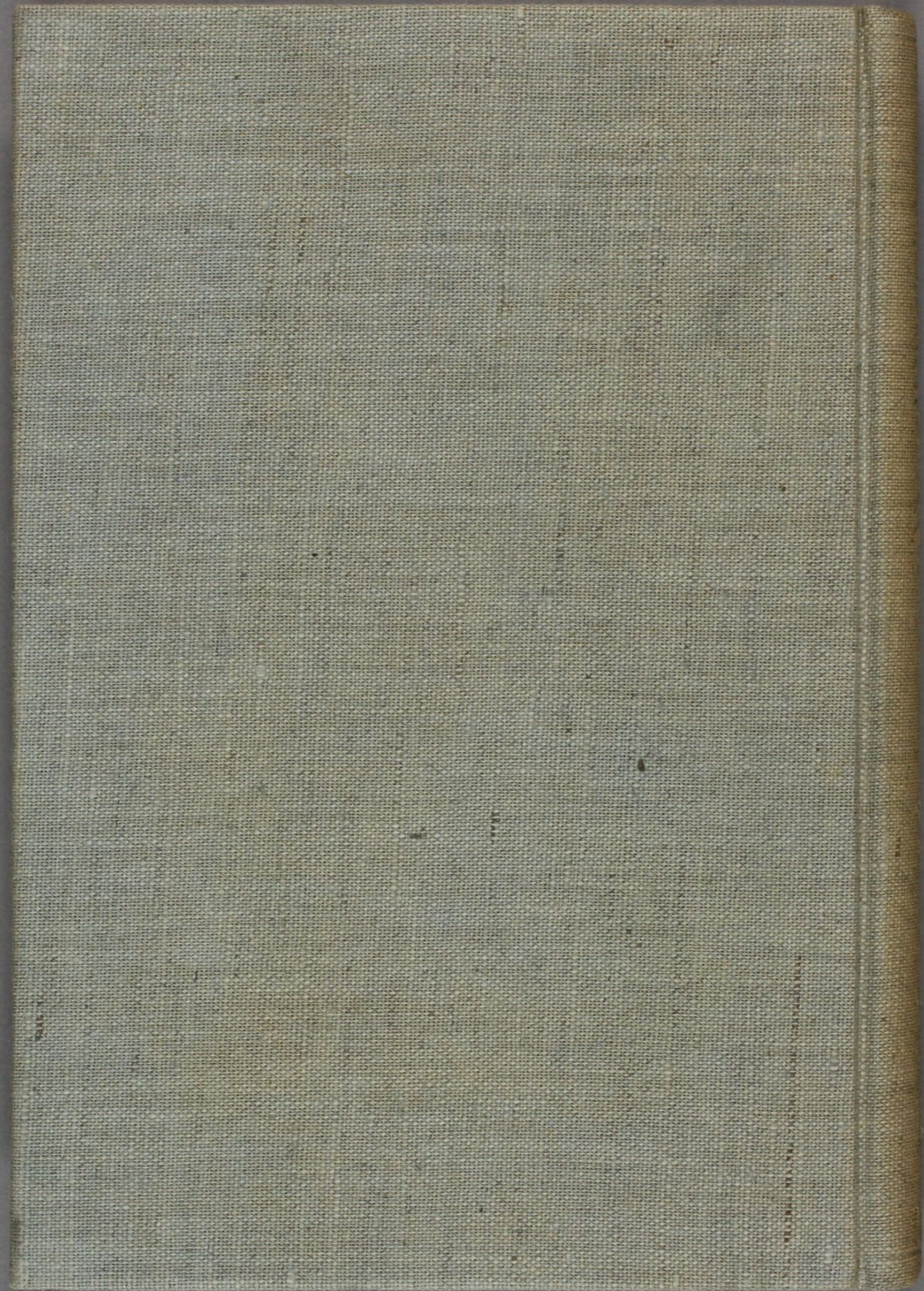


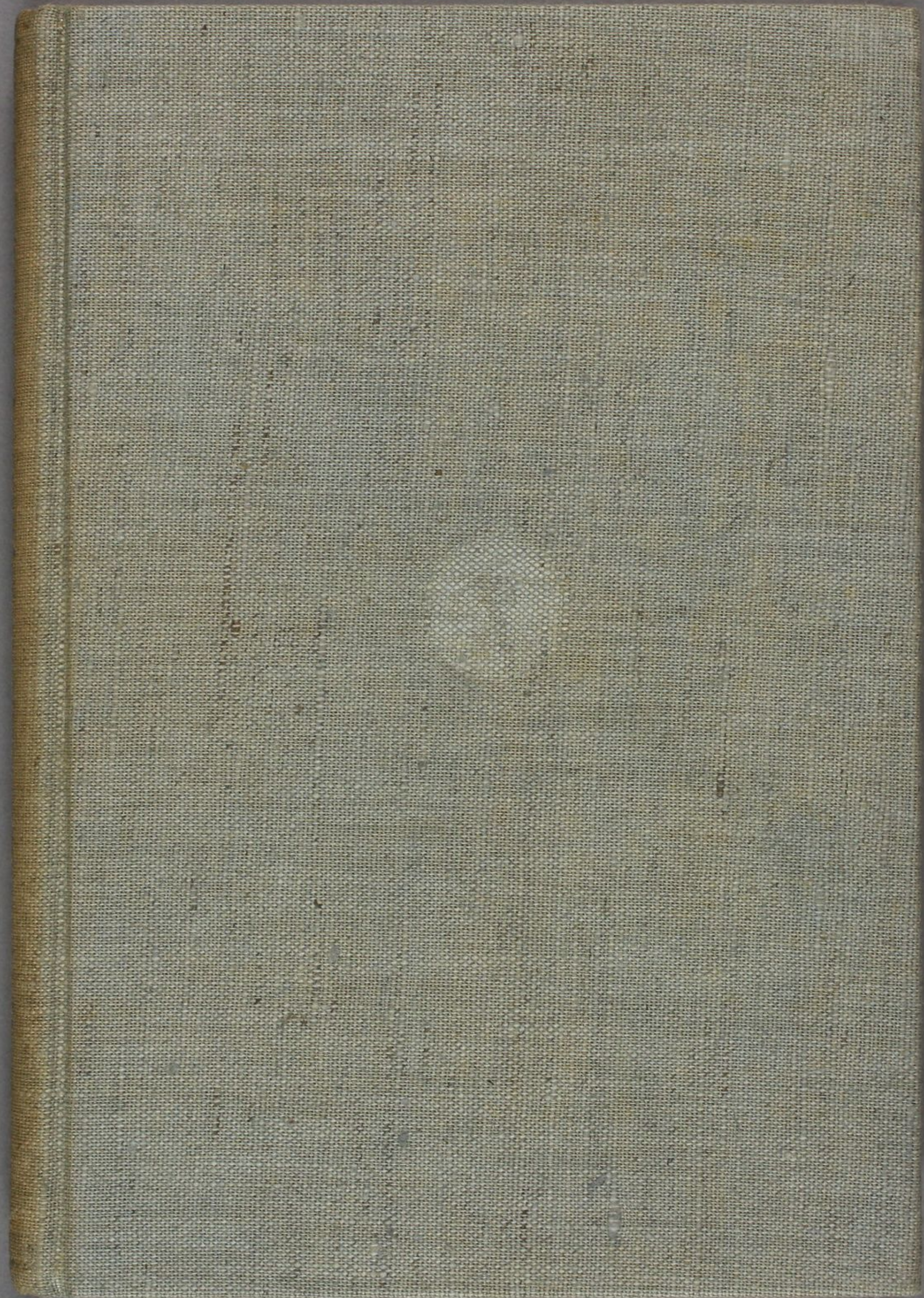
歌集
輕雷集以後

中村憲吉著











百穂




中村憲吉著

アララギ叢書
第六十四篇

輕雪集以後

岩波書店刊行

序

中村憲吉君の第四歌集「輕雷集」以後、歿年に至るまでに公表せられた短歌を以て本書を編み、「輕雷集以後」と名づけた。よつて本書は憲吉君の第五歌集となる訣である。命名も輕雷集の時に憲吉君自身いろいろと考へて手帳に書留めたものが残つてゐるけれども、この最後の歌集にふさはしいものも見當らぬので、簡単に輕雷集以後としたのであつた。

歌は雑誌・新聞に發表せられたのを岡田眞君が筆寫せられ

たものがあり、なほ中島周介君が憲吉君生前、やはり雑誌・新聞から筆記したもの一冊あつて、それを憲吉君自身折にふれて推敲訂正を試みたものがある。このたびはその二つを共に参考として編み、編輯の方法は輕雷集の時と同じやうにして岡田君が爲して呉れた。

その中島君の筆寫の分には、憲吉君の訂正のあとが間々あるが、明かに訂正したと分かるものはその方を採用したけれども、中には訂正の完成しないものもあり、また読みかねるやうなものもあるから、さういふものは致し方なく棄てて、

雑誌等に公表された儘に従つた。

本歌集は前言のごとく、一たび發表せられた歌のみに限つた。そのほか、書簡の中に書き送つたもの、手帳に記されてある未發表のものもあるが、其等は全集に收める方針を取つて、今回は収録することを見合せた。

憲吉君は作歌が丁寧であつたごとく、歌集の編輯も亦丁寧に、歌集にするときにいろいろ苦心して推敲するを常とし、またそれを樂みにしてゐるやうにも見えるほどであつた。ゆゑに、健康であつたらこの歌集もいろいろの工夫があつたと

おもふが今は遺著として發行せねばならぬことはいかにも悲しい。

憲吉君の歌風は、本邦和歌史の上に獨特の地歩を占めること愈確實となつた。生前にはこの趣がいまだ朦朧としてゐたかも知れぬが、棺を蓋ふに及んでこの特色がつひに決定せられるに至つた。そして、本歌集の歌は盡く晩年圓熟期の成産である。

昭和九年十月

齋藤 茂吉

目次

昭和三年

| | |
|-------|----|
| 阿蘇山の歌 | 三 |
| 阿蘇山途上 | 三 |
| 阿蘇大裾野 | 五 |
| 草千里ヶ濱 | 九 |
| 古坊中の道 | 一二 |
| 砂千里濱 | 一三 |

九月十九日冷雨ふる 一六
 日常吟(一) 一八
 日常吟(二) 二〇
 初冬の山家 二三
 山中の焚火 二七

昭和四年

紫宸殿 三三
 銀閣寺 三六
 浅春 三九
 江波 四〇

春山 四一
 弟の妻が死をあはれむ 四三
 梟 四四
 白田舎囃目 四五
 童馬山房即事 四六
 孟蘭盆 四七
 外祖母を迎ふ 四八
 秋日 五〇
 十一月八日在京冷雨いたく降る 五二
 初冬 五四
 女龜山 五六

冬山の牛 五八

昭和五年

海邊巖 六三

病床漫詠 六三

平福畫伯渡歐送別 六七

加納晴君を悼む 六八

春雜詠 七〇

山村の春日 七三

山火事 七四

春山行 七五

山どり 七八

植田即事 七九

梅雨 八四

大原夫人追悼 八六

帝釋峽 八七

佛法僧鳥 八八

高野山眞別處 九二

飛鳥 九八

初冬 一〇六

液雨ひさしきに倦みて 一〇八

夢殿祕佛 一一二

熟荒……………一一五
 山村の地震……………一一八

昭和六年

童馬山房……………一二三
 春嵐……………一二五
 早春雜詠……………一二六
 春庭……………一二八
 三次櫻景三趣……………一二九
 尾關山……………一二九
 鳳源寺……………一三一

土手櫻……………一三三
 この日ごろ……………一三四
 喜雨……………一三五
 病間遺愁……………一三六
 舊盆の月……………一四〇
 月夜吟……………一四一
 芭蕉の月……………一四二
 秋となりて……………一四四
 赤彦を憶ふ……………一四六
 秋の山田……………一四七
 稻田の霧……………一五一

庭の寒月 一五五
冬の鶴鴿 一五七

昭和七年

曉雞聲 一六三
しばし五日市に住みて 一六四
牡丹 一六六
松蟬 一六六
水鶏 一六八
病床秋雨 一六九
しぐれ黄葉 一七一

昭和八年

歳首有感 一七七
冬朝病床盪漱 一七九
四月十一日齋藤兄見訪 一八一
病間消息雑歌 一八二
齋藤茂吉君に 一八三
土屋文明君に 一八八
牡丹の繪を賜はりたる人に 一九〇
鉢植の牡丹を贈られて折々に 一九二
後夜の月 一九三

| | |
|------------------|-----|
| 消息の歌 | 一九四 |
| 七月七日炎暑歸郷旅途 | 一九五 |
| 青うらやま | 一九九 |
| 清夏歸居吟 | 二〇一 |
| 八月八日土屋文明兄來訪 | 二〇四 |
| アララギ第八安居帳 | 二〇六 |
| 八月十五日盂蘭盆會 | 二〇七 |
| 夏日銷閑 | 二〇九 |
| 悼大村夫人 | 二一六 |
| 九月四日颱風襲來して翌日につづく | 二一七 |
| 病床雜吟 | 二一九 |

| | |
|-------------|-----|
| 初秋の殘暑いまだはげし | 二二〇 |
| 白露滴々芭蕉に花あり | 二二一 |
| 秋霧いよいよ深し | 二二三 |
| 事につかれて小風邪あり | 二二五 |
| 山峽秋景 | 二二七 |
| 悼平福百穂畫伯 | 二二八 |
| 病床矚目吟 | 二三二 |
| 中秋明月 | 二三四 |
| 裏山しぐれ | 二三五 |
| 國土新に光る | 二三七 |
| 初冬の庭 | 二四一 |

山茶花……………二四二
 寄山茶花憶故平福百穂畫伯……………二四五
 臘月二十五日雪中出郷……………二四六

昭和九年

歲旦雜感……………二五一
 新春の雪……………二五三
 窓前……………二五五
 平福畫伯を悲しむ……………二五六
 御遺族……………二五七

昭和三年

阿蘇山の歌

阿蘇山途上

あを芝の外輪山ぐわいりんざんよりなだれたる巖の谿ふかし
底の激湍たき川がは

汽車みちの下びにふかき瀧おつる阿蘇の火口
 瀨のぼり我がをり

谿がはを遠したにみる山腹が街道となりて家
 むれにける

谿ぞこの河はとほしも山畑を釣竿もちてくだ
 り行く人のあり

旅を來し心はをどれ阿蘇山の青裾原にひろく
 向ひて

阿蘇大裾野

遠ぐには耕しごと異なりて霾のはたけに陸
 稲つくれる

阿蘇びとは物荷ものになふことうとむらしはつかの
荷をもみな牛に付く

野をみれば豊けかれども物うとき阿蘇の國人
富めりとも見えず

阿蘇山へわが乗る牛をやとひけり茶屋に曳き
くる矮ひくき赤あか牛うし

あか牛は見みからおとなし阿蘇びとの飼ふはほ
とんど赤毛牛なる

草原を牛にてくれば毛だもの匂ひを知りて
蠅のむれ寄る

風ひろき大草はらを牛にのり青芝山の温泉ゆに
ゆくわれは

牛の背に慣るればときに鞍を下り草はらのう
へに覆盆子をぞ摘む

わが行ける阿蘇の夏野の郭公はとほき谷間に
なほ鳴きのこる

おのづから牛の背より牛方に言ひやむころを
夕づきにけり

山原を霧ふき上り雨氣づくやその叢の夕ほと
とぎす

草千里ヶ濱

阿蘇山の見ゆるかぎりは草の山み空にちかき
馬飼ひどころ

山のうへに草千里濱とは寂しけれ雲がたちま
ちひくく時雨れつ

とほり行く草千里濱しぐるるや下りてあそべ
る馬の影みず

きり小雨牧場にいななく駒居ぬはいづべの山
のかげにか群るらむ

奥ふかき草千里濱の雨にあひ道べに立ちし雉
子をぞ追ふ

くさ原の盤紆はろけし雨のなかとほき小山に
馬あらはるる

大空に阿蘇の草山はてしなし放ちの牛馬とほ
く遊ぶべく

古坊中の道

鹽もちて牛をたづねに登れると山原^{やまはら}みちに逢
ひわかれたり

中岳^{なかたけ}のけむりがちかき草野はら三十六坊いに
しへの跡

砂千里濱

いづべよりゆゆしき霧か山のうへの霾^{よな}の砂原
に行く手をまよふ

山のうへに海濱^{うなはま}ありと思はねど霧さめ潤^{うる}ふ霾
の砂濱

天つ霧あたりを鎖ぢてかしこきや火口にちか
く地の底ぞ鳴る

霧原よなはらを雲くらく偃はひて風はやし行く手のひと
の帽吹きおとす

霧きり小雨こさめくらく繁はけれ霧路よなぢには硫黄のほひ吹
きそめにけり

天つ風吹きかはるらし目のまへは霧押し排わき
てすがしき砂原

來る人も霧の晴間に見えわたり一目にひろし
砂すな千里濱せんりはま

思はざる霧のなかより大き巖みちを塞ふたぎてあ
らはれにけり

九月十九日冷雨ふる

ひさに病み人にわすられし檀那寺の前住僧の
訃ふやつかひの言ひ來

○
山こえて雨にきたれる檀那寺むかしの塀のさ
るすべり花

しわがれて御經の調子つよく誦よみしこの人の
こゑは永久とこよに絶ゆ

曾てこの老院らうゐん家けきて弔たづなひしわれの祖父そふ母ははの年
忌古りたる

わが祖父に似かよひのある老僧のながき白眉
死がほにみつ

日常吟 (二)

夏よりの屋敷普請に落ちつけず打遣りごとの
溜りたまれる

裏屋こぼち邸地ひろみし石垣へ朝ゆふ川よ來
鳴く鶴

霧ふかき秋となりぬれうら山が朝おそくまで
見がたきほどに

秋冷えて霧いたくふれり普請場に朝の焚火の
ほのほ立ち見ゆ

山したの熟れ田の稻におぼめける霧ふかくし
て日和思はしむ

日常吟 (二)

なが年の酒場は分家させしかば事をばかへて
家をたもたむ

年ひさにつかはず荒れし屋敷水車つひに壊ち
てこころ安けし

つぎつぎに建物ふえし屋敷ぬち穢雑きを壊ち
片付けにけり

石垣の普請の指圖に夏過ごしひとの間ふほど
日に焼けにける

この宿驛の西側の屋敷田よりたかしみな石崖
を裏に築きたる

普請して石垣たかくなり
にけり屋敷のしたに
小川のせせらぎ

うら座敷かは屋もこぼち常かげの土に日を當
てこころ嬉しむ

取り除けて明しと思へども然れども親しみふ
るき建物の跡

いとけなき記憶にのこる屋敷のさま今とかは
るが心なつかしき

石垣の蛇がよく來し赤土ぬりの土藏がむかし
背戸にありにし

初冬の山家

夜半にして時雨のきたる山のかひ日和さだめ
ぬ冬さりにつけり

冬されば夜なかの雨の冷えやすし時には朝を
斑雪おくころ

○ 住ひ家の普請なかばを冬に入りことおほくし
て年暮れんとす

日本海の寒さのおよぶ國ざかひ山家ずまひに
雪をおそるる

この冬は塀をこぼちてあらはなる裏の刈り田
につゆ霜を見る

收穫のをはれる峽はひそかなれ裏山の竈に炭
焼きそめぬ

うら山にしぐれ降りつぎ燃えゆける炭竈かまどのけ
ぶりの青くもぞ澄む

歳としの暮れ幾日もなきを今日雨の暖かにふれば
心落ちつく

ふゆ庭の石より立てる音かそけし姿のはやき
三十三才みそざいどり

普請場ふしんばに掘りおこされし庭石は寒時雨かむしぐみふりみ
な濡れにけり

山中の焚火

くに境の山にきたりて秋はやき時雨にあひぬ
単衣着ひとへながら

山びとの焚火にあたり着物乾すひまも木かけ
に雨漏りのする

雨ふりて山ふかければ谷みづのまだ濁らぬを
汲みて茶をにる

山びとの焚火たくみなり燃えやすき木をよく
知りて生木をも焼ぶ

相寄りて山の晝餉に背負ひ來し大き飯櫃ひら
きてぞ食ふ

山なかに楮木をたわめ沸かす茶のにほひかな
しも煙くゆりて

おく山の晝餉の焚火たぬしけれ世間ばなしも
大びらに云ふ

山にして食す飯うまし澤庵漬を誰れはばから
ず音さして食む

雨ながら焚火の煙ひろがりて木立のおくに入
るがしづけし

山びとの心のどけし休憩處のたき火そのまま
焚きすてて行く

昭和四年

紫宸殿

一月三日子供等をつれて御即位式儀御
跡を拜せしむ

○
紫宸殿みまへの旗にひとときの斑雪はたれのふるを
美うるはしみけり

宮のうち百のつかさに耀きし御大典おもほゆ
み旗をみれば

玉敷の御庭かしこし庶民もゆるされてふむ吾
もわが子も

長兒はすでに小學校に歴史を學べり

紫宸殿みなみにむかひ七の門御庭をまもる吾
子よ知りなむ

悪源太が重盛を追ひし古ごとや今冬に熟るる
右近たちばな

建禮門外廣闊たる御所庭園内を見渡す

今日もまた塚御門ゆ潮のごと参るくる民ら見
れば思ほゆ

銀閣寺

竹林のおくに斑雪の銀閣寺庭しづやかに山に
むかへる

林泉のうへに高くは植ゑぬ古赤松の雪をこぼ
すが池におもしろ

庭池の飛び飛び岩に雪のおけ半ばとけしは濡
れのよろしさ

山ぎはの夕寒庭にのこりしか逃げたつ鳥のお
との大きさ

山際やまぎはにわきて寒けき庭づくり山みづ凍り池へ
ながれず

佛堂ぶつだうの香ながれ出るしづけさや雪凍ゆいてんとす
林泉のゆふぐれ

雪庭のゆふべは寂しかかるとき東求堂とうきうだうの人を
起さむか 義政公像

浅 春

夜の庭の木の葉にかたく降るあめの氷雨にな
らぬほどの暖さや

○
おぼめきて月ある夜はうら山の下びにともし
川瀬のひかり

江波

春さむき入江にあそび白魚の生きてわかきを
 酔につけて食ふ

島々にしら雲居りて明るきは海ばらのうへ春
 になるらし

春山

雪のこる春にぞなれる山笹に鳴くうぐひすの
 短かけれども

ひと冬ををはる深山に飲むみづの岩をつたふ
 が朽葉のにほひす

日向ひなたほき山のくぼみを名づけたる馬の炬燵と
いふ窪に來し

春山はあつく落葉の貼はりつけり冬ながき雪に
壓おされけらしも

辨當ののこりを棄てぬ枯山に殖ふえはじめたる
小鳥のために

弟の妻が死をあはれむ

おもかげを我はあはれむかぎろひの幽ほかに逝
きて清稚きよわかき妻

うたかたの命をなげく昨日ありて今日の朝に
みれば悲しき

梟

田植すぎて山河のうち静もれか山のふくろの
晝も里にいづ

梅雨のふる田の電柱にふくろ来ていち日わび
し山へかへらず

白田舎矚目

門のうちは清くしづけし新竹の葉のしげり蔽
ふ土をし見れば

赤松の根かたに置けるひとつ石芝生のうへに
梅雨ふらんとす

童馬山房即事

焼あとは草野と荒れし君がいへに五年ぶりな
る一棟建ちぬ

小夜ふけを行きて浴ゆあみぬ焼あとの荒草はらに
のこる湯ゆの室むろ

孟蘭盆

孟ぼん蘭らん盆ぼんにして燈籠の灯ひをみなもてり古きあた
らしき吾が家の墓

稲田やや穂ほ孕はむがうへに赤あきつ翅つばききらめき
生れてぞとぶ

宿驛路にひくく群れとび往來へる孟蘭盆の蜻蛉の手に捕りやすし

外祖母を迎ふ

なにごとも有難がりて聞きたまふ九十過ぎたる御顔に罪なし

享くる齡のめぐみの過ぎて痴けたる嫗たりぬと笑まひ言らす

老の眼のめでたき人か部屋にゐて遠山にゐるものを見給ふ

今のことをいま忘らすれ曾孫らに可笑がられて耳貸したまふ

百歳ももとせはながからぬぞよと笑ひごとたやすく言の
れどかしこく聞ゆ

秋 日

秋の空に雲おほくなりて池の魚影にしばしば
おどろきて散る

川邊かはべ田だの稻の粉花の散りそめて池にいるみづ
鯉をやしなふ

稻田乾て餌の失うするらし池へ出て金網かなあみをねらふ
馳をみれば

畦豆あせまめのあを葉縁はふらど取りおもしろく川邊の棚田たなだは
や熟れそめぬ

十一月八日在京冷雨いたく降る

世のうつり家建ちかはる東京に雨やどりせむ
軒なくなりぬ

いささかの途中のあめは軒づたひ昔は行きぬ
傘もたずとも

街のみち掘りかへされて落ちつかぬ人の生活
や心荒ばむ

震災のときに起りし遷都論かりそめならぬこ
とを思ひ出づ

わたくしに物をおもへば關らぬことにも心わ
れは亢ぶる

初冬

秋雨のしげき今年は熟れのころ晩稻のうへに
雪ふりにけり

北山に檜苗植ゑさせゐる人に今朝の霽の降り
か濡らさむ

氣づまりし普請をはれば木屑など散りぼふま
まに庭冬枯れぬ

○ 冬庭に山小鳥下りガラス戸へおのれ寫りて啼
くがさみしき

思ほえて寂しきわれか年ごろを物におこたる
癖つのりける

女龜山

國境にいざよふ雲や國ばらの雪もしぐれもこの御山より

八千とせの森にしげれと雲のゐる女龜の山に
檜を植ゑまつる

うつそみの命さみしもこの山に百世の後の樹
を植うわれは

冬づけど植ゑをへぬ山いち二度は氷雨ふりけ
む檜葉の焼いろ

造林の山を廣けみ日照りつつ天のしぐれの降
りすぐる見ゆ

冬山の牛

冬がれて草減りゆけば山の牛みづから里へか
へるころなり

ふゆ山をまよひ出でて来てこの日ぐれ宿驛を行
くありとなり村の牛

興がりて宿驛の兒らがをちこちの軒へ追詰む
る迷ひ牛あはれ

おく山の雪をおそれて村びとはかへりおくれ
し牛を尋めゆく

崖に落ち凍て死ぬもありぬすまれて歸らぬも
ありふゆ山の牛は

昭和五年

病床漫詠

輓の海のふるき島かも巖にのこる遠世とよよの潮の
あとは寂びたる

海邊巖

大晦日おほみそかこと片付きてひまありて疲れし風邪かぜに
臥ふしにけるかも

病むわれに用を告げこぬ今日ひと日あな忝かたじけな
衾ふすまかつぎぬ

年はじめ病臥こりつづけぬいち日は雑煮ざぶ祝いはひを起
きてしつれど

假初かりそめにこやりしわれや日を経つつ病ながびく
枕まくらにふしぬ

病室かこひをかく圍かこひして臥ふすことの吾がしづかさの
いく年ぶりなる

雪かぜのひた寒くなる日ぐれより西の障子に
紙帳しちやうをおろす

目のくれを窓にさやりて降る雪の積みつつか
あらむ裏の株かぶ田たに

思はざる病にこやる年はじめ吾が厄やく年としを氣に
とがめける

心よわく病みつつ思へば命をばおろそかに過
ぎし悔おほくあり

けたたましき裏の川田の鴨のこゑ月照りなが
ら雪ふるらむか

平福畫伯渡歐送別

海遠く旅行く君を一目ひとめもが途中に船を捉へて
逢はむ

加納曉君を悼む

病むわれにくらべて思へばこの夕餉胸につか
へて君のなげかゆ

うつそみに終に悲しき君となりぬ壽齡のうへ
に誰無けむかも

雪荒れのけふの日暮にかぎりなく人のいのち
を寂しくぞおもふ

このゆふべ病の床に起きてすわり心に云ひて
君をとむらふ

日常聞ける聲おもほえて君思へば何處か旅し
て世にありぬべし

在りし日の君と好みし酒をもてみ墓の土に我
はそそがむ

春雑詠

草の家に似つきて見ゆれ散り惚^ほけても趣のあ
るしら梅のはな

山川の岸のしら梅の花をはり春ぬくくなれり
更にこのごろ

春ふえし水のひかりをかなしみぬ川やなぎう
ごく水^{みぎは}際に下りて

草青む春田とほれば頬白の出てゐるこゑの何
處かこもりぬ

おく山は芽吹きのおそき樹ごもりに淡くれな
 ゐの桂木かつらぎのはな

春にして芽吹かんとする枯山からやまは木原のうへぞ
 霞みわたれる

枯れ山に花先んじて黄に咲ける黒もじのえだ
 折ればにほひぬ

雨ざれて鳥の羽むしれ草にあり冬の鷹出て喰は
 みのこしけむ

くぬ木原巻葉にのこる蟲の巢はかぜ温めども
 いまだ破れず

山村の春日

山火事

「春風火を好む」と書きし立札や峽の村山の落葉
の暖むこのごろ

其處此處の火事の小噂話のみならず今日は煙
あがるちかき山火事

いく年の落葉のふかき春山の伐りあと焼けば
土よりぞ燃ゆ

山火事に鎌鋏さげて行きしひと煙に塗れかへ
りきたれり

春山行

枯れ山に春のかぜ鳴りそぞろかに乾きしおち
葉木のなかを飛ぶ

谷のへの稚うぐひすのしばらくは人とわかれ
し山路にきこゆ

ちかくより山雞立ちて音たかし垂り尾をひき
て木の上とぶ見ゆ

春山に来てゆくりなく山雞の雌雄のあそびを
驚かしける

いくばくは芽ぐむ樹ありて濕り地に山の蛙の
いちはやく鳴く

いちけたる植林の杉は花結びその低木原うぐ
ひす啼きつ

山どり

春の夜の小雨にぬれて山びとは生かして捕り
し山雞もて來

赤金の羽毛をかざる尾長どりは抱きすくめつ
つ灯にかざし見る

夜すがらを伏籠にさやぎ鳥馴れずなほ人にむ
きて嘴を嗔らす

かへるでの赤き芽を吹く木のもとに鶴雉をだ
して籠に伏せて飼ふ

植田即事

雨足りて田植太鼓のそこ此處にするころ青葉
峽に張り満つ

卯のはなの季節きせつにいれば手助けて田を植ゑい
そぐ峽びとのとも

峽の田は荒肥あらかへをして水ひやし牛あまた入れて
代しろをぞ搔かす

けふ背戸は居ながら見えて早さ少女をとめうた太鼓に
ぎはひ田植はじまる

飾られて田に入る牛のいり組みてきほひ相追
ひ代搔きめぐる

しろ牛の田を搔きならす直ぐうしろ燕あつま
りて餌をひろひ舞ふ

山ちかき田植人らにほととぎす頻りに啼けど
 かかはりのなし

あたらしき代搔きあとの泥濁田は山あをく映
 りかげしづかなる

田をあがる代搔人より先づいこひ申刻茶飯を
 食ひはじめたり

畦みちに飯はこぶ女の脛もとにかはづを畫き
 し繪をおもひ出づ

夕づくや田植仕舞の代搔きも唄も太鼓もとみ
 にせはしき

ゆふ山に田植たい鼓のなほひびけ代搔きうし
 は川へ下りゆく

梅雨

山がはの荒ぶる雨の今日もふり堰せきしがらみの
みな落されつ

おそき梅雨つゆいち時にふりて山かひに大荒瀬おほあらせ川がは
日竝べて吼ゆ

山がはは怒りみなぎり濁りなみ風をはらみて
川たかく飛ぶ

ひたりたる河原岸田の澱よどによる魚すくふ人の
日ならべて出づ

橋脚の出みづのすごき底にして岩ながれゆく
音こもごもに

大原夫人追悼

さ夜ふけし隣室となりに風爐ふろの釜なりぬ心くばりて
賜ひし刀自を

つつましき人ひとにありながら母ごころまな子の
ことはよく語らしき

帝釋峽

溪川たにがはをすべて蔽へる青葉かぜ河鹿こゑ澄むく
だり瀬ごとに

飛ぶ雲も下りる舞ひ來よ巖ながら溪へかけた
る雌雄めをとの神橋

うしろ瀬の河鹿きこゆれ雌の橋の下くらがりに水ふむわれに

佛法僧鳥

高野山に後夜の月てる御廟奥三寶鳥のこゑ待
つわれは

いにしへは深山の奥に佛法にあふ尊き聲と戀
ひつる鳥を

御廟杉に月照りきたるひがしより佛法僧鳥の
とほく呼びそむ

月のぼる高野の奥はひろからし佛法僧鳥の鳴
きつつ移り來

ぶつぽふそう御廟ミミヤ月夜ツキヨに來てなけり靄カゲのなか
よりほがらかに鳴く

ほがらかに佛法僧鳥の鳴きくるは鳥のこゑと
は思ほえなくに

三寶のこゑ鳴くとりは大師さへいみじき鳥と
聞きたまひけり

御靈廟ミナミヤの杉はしげれれ三寶のこゑなく鳥をと
こ世にまでも

遠山の月夜に答ふこゑおこり佛法僧鳥は一つ
にてあらぬ

ぶつぽふそう月照ツキテる山にふたつをり鳴なきうつ
りつつ夜もすがらなる

高野山眞別處

むささびも呼びてなかぬか暮れかかる高野の
 おくの眞別處みち

ゆふぐれて寺門じもんに來ればいきほへる細谷川ほそたにがはや
 雨ふり増しし

・
 日のくるる寺門の谷はしづもりて竹むらあり
 て霧ぞうごける

雨あとを直ちに山は日暮るなり谷かけにある
 ひとつ寺の庭

しづけさや高野の山のおくになほ隠れし寺を
 求めてたてにけり

にはたづみ砂の流れし寺門みち杉は日ぐれて
 霰しやうきつつつをり

山でらの夕庭にしけるしろき花あめに打たれ
 し沙羅の木のはな

ことさらに人來ぬ谷に建てしてら今にしづけ
 し眞別處院しんべつしよみん

山ふかく日暮るる寺に世を思へばむかしも今
 もあらずしづけし

谷のうちに四方の音せぬむかしより戒壇院かいだんゐんを
 嚴おごせかにもつ

○
 寺門じもんにて敬禮の鐘をつきて入れば山へひびき
 て音あはれなる

夕ぐるる山寺の庭おとのなし吾等きたりて囁ささや
くをはばかり

七

○ 水のおとかすかにするは日の暮れし厨裡くわにあ
るひは笈かひかも落つ

○ 闕伽あかろ水を汲みてか雨や降りぬれし厨裡のみぎ
りの大備おほび前甕ぜんがめ

山寺の屋根に霧ふかく雨あとの砂庭すなにはともに暮
れにけるかも

日のくれのこころ戀こほしもとどまりて山林さんりんのこ
ゑを深くきかむか

○ うつし世に久遠くわんのみちは戀こほはずともわが下凡げほん
さへなげかで過ぎし

飛鳥

八月十日齋藤茂吉森山汀川兩君同行
飛鳥の岡に宿る

多武の峯の月しろどきを見瀬に下り岡へ行か
むはこころ戀ほしも

夕闇の道にいきるる土のにほひこの古國を思
ひつつぞ來し

山かぜを孕みてたぎつ明日香川の出ぐちの岡
の里にやどらむ

仲大兄鎌足も南淵へかよひけむ山かひみちを
友と月夜に

山を以てしづかにかこむ高市村いにしへびと
は住みつきにけり

おぼろ夜に見えわたる山の幾廣田ふるき京の
あとか寂びたる

山のうへの上居むらより照らしくる十六夜月
にいにしへ念ほゆ

旅ごころ静になりぬ片るなか明日香の岡に友
とやどりて

かかはりの多きいく年や忘れはてて旅のひと
夜を友とをしみぬ

おのがじし事にかまけてしづかなる遇ひまれ
なりきこの年ごろは

くつろぎて君と起きふす昨日今日わが歡よろこびを
しづかにたもつ

岡寺門前の旅籠屋はかつて故赤彦君と
泊りしところ

大柘榴おほざくろ木の實のあひに赤き花のこり寂さびびしこ
の庭見おぼえのあり

霜月しもつきをいたく柘榴の熟れたりし庭にわが着きき
むかし宿りし

ゆくりなく明日香にきたりうつそみは九年ここのとせぶ
りの旅寐をぞする

明日香川ありて激たぎてどむかし來てなげきし友
のうつつにはなし

たづさふる友を見て思ふうつそみは肝むかふ
君とわれとのこれる

飛鳥の坂田の里に亡友高崎義行君の墓を訪ふ

高野にて盆はん不ふ斷だん會えにあひしかば來るえにしあ
りき君が墓べに

わが知らぬ十年ととせのうつりいたいたし君が血す
ぢの殆どほろぶ

荒ぐさが穂草ほぐさと長たけし垣かきのうち君が白墓しらはかへわ
けて來にけり

君が墓に來て泣きわれに告のらせりしその老母おはは
にまた逢はめやも

吾がこころ慰まめやも夏草の荒れたる墓に香
焚きのこす

初冬

寒時雨降りみ降らずみ染めなづみ四方の黄葉
の色くすみたり

照り降りての時雨つづけば山かひの黄葉へ虹の
しばしばに立つ

氣がかりし雨のかはりや今朝にして山の黄葉
に雪眞白しろなる

下ごころ我があわただし刈りのこる稻に時じ
くふる雪みれば

山かひの黄葉に稻に照りかげる雨のせはしさ
雪を消ちつつ

液雨ひさしきに倦みて

冬づきて時雨のはれぬ田にはなほも稻城のこ
れり濡れさらされつ

山かひの時雨くらしも刈りのこる濕田の稻の
朽ちやしぬらむ

霽るるかと思ひし時雨のまた降りて刈りのこ
りたる稻田をぬらす

壁のごと稻城かくみていく日か刈田しづけし
來るひとなしに

からすさへ見るは偶たまなり雨さむき稻城のすそ
を擦すれずれに飛ぶ

寒しぐれ心はくらくきほはぬに見み聞きく世せ間けんの
滅め入いるこのごろ

穫とりいれ米まい歳さい暮ぼせまりてしかも値ねなし田ひな舎かも
世よさが落おち著つかなくに

夜よ逃にげせる百姓のあり穫とり收いれを雨にもやめ
ず急いそぎたりと云ふ

うらぶれて久しきしぐれ冬づけど物のきまり
の付つかぬに苛いら立たつ

人の見て静かなるべきわが生くら活しよしなしごと
に多くわづらふ

夢殿祕佛

大正十一年霜月はじめ島木赤彦と法隆寺
にあそぶ

〇 われ等來つる靴のおとのみ登石道のくさ霜枯
れし夢殿の庭

そそぐ陽に蕘はしろく火炎はけりいみじき御
屋の四方のしづけさ

ゆめ殿の暗きに低くきこゆるは祕佛をひらく
經の鉦おと

くらがりかしこに光をはなつ御ほとけは生きながら
坐せりましこ恐しわれは

いみじくも燈ひに照りいでし御みほとけの金色こんじきの
體たいあたたかく見ゆ

目まのあたり生ける佛にあひまつる恐れをもち
て額ぬかづきにけり

夢ゆめどのの御みほとけ見ればうつつなく尊うやまつくませ
し大王おほきみのおもほゆ

熟 荒

收あ穫と期きになりいみじき米の値ねさがりや村むらびと
のころ俄にまかにあわつ

町まちへ負おふ米こめみな安やすく値ね切きられて農のう夫ふらかへり
いかりてぞ云ふ

米賣るも農家の錢はたらはざらむ避けがたき
税に不平のおよぶ

村のうち頓にすばらし夜ごとを物の評議に人
つどふなる

誰となく頼母子講を休めちふ返掛にこまるが
云ひ觸らすらし

借金をたがひに保證しあひたる一部落ありて
倒れむとする

月のうちに倒産者四人つづきたり小商人より
まづ村はこまりつ

鄙にては歩行にかはる自転車も税を節約めて
廢めるぞ多き

米價やすき不満の遣れぬ農夫あはれ村俸給取
者をいちめはじめぬ

百姓の苦情つぐるは宜なれどまた身勝手なる
言ひぐさのあり

山村の地震

○ 山かひに地震すぎし夜半を空あかし炭竈の火
事か山におこれる

○ 山家びと地震にあふはまれなるに餘震つづけ
ば況してをおびゆ

○ 隣國に人牛うまれて豫言すところの地震をば言
ひ觸らしをり

豫言めく地震のうはさ農家は物におそれふ
かし小屋かけ備ふ

生ぬくき變態氣候とみに去りぬ地震のあとを
雪ふる寒さ

昭和六年

童馬山房

一月十六日童馬山房に宿り午後の睡をとる

凡
〇
この家にわすれて寝しが喇叭^{らっ}鳴り麻布聯隊^ち
かきを思^もひ出づ

焼けあとはいま大建物のさへぎらね日ぐれて
とよむ麻布の喇叭

大建物ふるきは焼けてまた建たず先師もきた
りよく會ひし家

堀のうちの焼けあと古りぬいくばくを畑にな
ほして君住みつける

春 嵐

春嵐芽吹かぬ山に吹きとよみ遠近に樹のきし
りゆく音

枯山に來りて見れば諸木はすでに大きともし
き春の芽をもつ

早春雑詠

居間のまへに去年植ゑにける竹すこし白梅の
 咲きて清くかなひぬ

山みれば雪残れども夕づく日玻璃戸のそとを
 蟲すでにとぶ

春萌ゆる芽かも掘るらむ裏の川の岸にひさし
 くかがまれる人

春いまだ田は鋤かねども堰のみづ分れひかり
 て山蔭へみゆ

山の塘池春はあふれる上田居にしぶきを上げ
 て樋を走るみづ

春庭

もとほりて松に水照る磯に出て石をつたひて
池をわたりぬ

山よりの水ながれ入る庭池に春おのづから鮠はや
の生れし

庭池は瀧をおとして波をおくり波折なをりのすゑに
鯉ぞ遊げる

三次櫻景三趣

尾關山

この山の櫻にむかひ流れくる河ひろくして水のひかれる

街べよりみる城山はいく段だんも咲きかさなりし花の山かも

花のもとの酒宴うたげにゑらぐ人みれば今日のひと日は世苦せくなきごとし

山のうらは櫻にかはる松ばやし目ましたにふかき青淵のいろ

鳳源寺

寺に來て人を回向し咲きがたの櫻にあふが心うれしき

築庭は山をとりいれて櫻あり寺房にとほるう
ぐひすのこゑ

古りのこる枝垂櫻や血統はやく絶えし國守の
菩提寺の庭

師直の懸想のひとの生ひ立ちし館のさくら咲
きいでにけり 瑤泉院出生地なり

土手櫻

土手ざくら妓樓にそひて咲きあかり花のうへ
より三味の音おこる

ひたむきに花吹雪すれ土手したの墓のうへを
吹きみだし飛ぶ

堰の水減りし下瀬は昨日まで河鹿鳴きしが梅
雨ふり足りぬ

病間遺愁

○
かりそめに病みつつ思へば現身はさかりを過
ぎぬ氣には負へれど

ことわりは病みていなめね老にいる四十過ぎ
ての身の無理かたし

病みながら如何におもへどすべのなし吾が身
にきざす老をうべなふ

○
おそき梅雨降りてはれねど裏山は季節に入り
し日ぐらしのこゑ

病中は常習の麴藥を用ゐざれば夜々の眠
難かりなむと思へるにさはあらで熱の故
にや疲れながら怪異の夢の數々を結ぶ

蚊帳かやのうちにつうつねむり見る夢はおなじ
つづきを見てゐるらしき

誰か吾わを此處にはこびし寢ねながらに見はらす
丘の岩のうへの寢床ねど

わが來しはむかし隱者いんじやの庵いほならし山がはなが
れ奥ぶかき里

ひとの來て書きのこしたるもろもろの文畫帖ぶんがわてふ
あれど主人あるじなき庵

庵にある漢文卷かんぶんまきも難かたきさへ不思議にらくに讀
めるわれかも

山かげの河原づたひにうそぶきて吾が行ける
己が姿を夢にみき

舊盆の月

山峽の稲田に照るは時すぎてすでに静けき舊
盆の月

秋にしてやうやく逢へる月夜かも病み經し日
數忘るるに似つ

月夜吟

月よみの圓まどかなる見ればとことばに天あめにかか
りてひとり照るらし

天あまのはら聲なき月の照りてゆく秋の新夜あやをか
ざりなくおもふ

國ばらに照りわたる月は息衝いきつけりあり無し雲
の生あれつつか居らむ

芭蕉の月

○ 月の出の夜々におくれて照りきたる軒の芭蕉
に露しとどなる

倉の屋根に月ののぼりて影ひくや母屋おむやの端つよの
芭蕉のあたり

建物の其處此處のかげにむし鳴きて門内の月
ひるよりあかし

照る月は小壁に沿ひて軒したに芭蕉のかげの
大きなる揺れ

月夜かぜ芭蕉ひろ葉に音しげくしぶくは露の
置きあまるらし

秋となりて

稻原いなばらの早稻穂わせほにしろく照る月は夜ごとに明あかし
山の峽せまにも

病む部屋やまにももの思おもふ夜よるはいたく更よけし西の障
子しよに月の照らしぬ

裏山は風ぞそよげる夜くだちて月ちかづくや
木の葉は照らし來く

赤彦を憶ふ

六年^{むとせ}経て君がみ墓をおこすとき手^た向^むけに行か
ず病みつつ吾は

遠く住みて心まかせぬ年ごろや君がみ墓を行
きても掃かず

年を経て今日に思へば亡き人の一^{ひと}生^よはおほは
れものしづかなる

秋の山田

小山^{やま}田^だを刈るひと見れば時じくの栗をぞひろ
ふ稲のなかより

みちに踏む草かげの毛毬いやひといろの黄葉ば
やしに栗まじるらし

わが山の新開田へ越えむ近路ちかぢあり黄葉ばやし
を抜けてきたりぬ

山に入りておち葉はいまだおほからず明あかき黄
葉のぬくみを感じず

○
山のいへはまはりの林伐りひらきこと足る畑
にふゆ菜な青みぬ

小家こやかけて山田づくりに来て住めり村商賣むらあきなひの
立たぬ夫婦が

家のそばの大松おほまつのしたの笹生ささふには鶏とりはなち飼
ひて畑になさむとす

この秋も山測量をさすひとは此處ををへしか
にひ杙木立つ

田へ引かむながれを樋より池におとし黄葉も
散りて飯釜しづむ

眞むかひの山家のなかは西日射しあからさま
なる佛壇のみゆ

た
氏

〇

稻田の霧

裏川のいみじき霧にこのあした火桶そなへて
部屋ごもるわれは

川の音は向うにすれど霧ふかく下りし岸田に
いね刈りそめし

刈るいねに霧のうごくぞさみしけれ鎌入るる
ひとは埋れつつ見ゆ

霧のふる今朝のくらさに稻刈れりさみしき人
に呼びかけなむか

けたたましく過ぎける百舌鳥や田に下りし霧
のふかさや晴を思はしむ

田のなかに焚火をしたり霧ふかく煙まつはり
稻へなびかふ

田川なる霧晴れ行けばほがらかに先づうら山
が眼ぢかく顯れぬ

朝闌けて峽の稲田は日の照れど川かみの山に
霧ぞのこれる

そこばくの稲刈られゆく田をみれば山よりす
ぐに鳥下りたつ

山かひは川ひとすぢの兩がはに霧はれゆきて
刈りしほの稻

あしたより鎌入るるおとの田にきこゆ霧うご
かして稻を刈るひと

日が照ればおのづからぬくし朝田にていね刈
る夫婦ものを言ひそむ

庭の寒月

月冴えてこゑなき夜^よ半^はや病むあとの肌をかば
ひて庭におり立つ

照る月はさして更けねど露ふかく庭の石にも
置きぬらしたる

たち葉木へさむく月照り庭のなかは蟲が鳴く
音ねの求むべくあらず

照れれども冬の月かも庭のうへに葉をもつ樹
樹のかげ物くらさ

庭のうちには月の冴えつつ小夜ふけて霜のいた
らむ寒さきびしき

冬の鶺鴒

裏川に棲すみつく鳥かせきれいのみ冬はことに
庭に飛び来て

部屋のなかに我がしはぶけど驚かずせきれい
はあそぶ冬庭の石

ガラス戸にながるる霧や朝ぎよめ塵をしづめ
し部屋をとぢなむ

霧ふかき川より來啼くせきれいの何處ぞと思
へば屋根に居るなる

白きもの川邊に飛ぶはいそがしく此處に居り
にし鶴鴿ならし

昭和七年

160

曉雞聲

夜起きして神へまゐればあかときの一
番雞をかへりに聞きぬ

年のあさを竈かまに焚く火が戸よりみゆ暗きに起
きし草の家ありて

しばし五日市に住みて

ふるさとのしのこしごとの気がかりを未だも
持ちて旅たびに居ゐ馴なれず

旅にして今宵住みつく家のうら枯蓮かれはらすだ田だに時雨しぐれ
降りいづ

氏

〇

炬燵して寒きをいとへ窓の下の蓮田はすだの枯葉しぐれけ
ふもしぐるる

〇

夜半すぎてふたたび窓の明るむは月蝕げつしよくのやみ
て照りそむるらむ

氏

〇

月蝕のひかり低くして波にあり潮満ちきたる
家裏いへうちらの堀

氏

牡丹

春の日の須臾しゆゆに闌たくれば鉢の牡丹ふつ二日ふつかかり
ておもく開きぬ

松
蟬

しりぞきて病にこもる吾にさへするどく迫せまる
世よさがは思ほゆ

病む吾にこころ昂たかぶる癖つきて熟うま寝いしがたしこ
のごろの夜よる

磯山いそに松まつ蟬せみ鳴けば吾が病癒えむ日待ちてこ
ろ苛いらだつ

水 鶏

五月雨は日暮にやみてこの堀の干潟の尻に水
鶏なくなり

海邊にも水鶏のなきて日の暮はあはれなりけ
り梅雨に入るころ

故里の植田を思へば海邊にて夜きく水鶏戀し
かりける

病床秋雨

雨いく日檐の芭蕉にさむけれど秋かぜ吹きて
いまだ破らず

ふるさとに病癒えねどかへりきて寒きあめに
も日日をおちつく

雨さむく日ならべ臥せば疊にはひるをねずみ
の音なくて出づ

病むところに炬燵をいれぬかつて無き疝のいた
みか雨冷ゆるころ

家ゆする風をし聞けば山かひは遠きそらより
木がらし來る

しぐれ黄葉

音たてて今日もしばしば刈小田に時雨ぞいた
るうらの山より

うら山の時雨にもみぢ荒れながら散りみだる
見ゆ手にはとれねど

ふる雨に山へ去ぬらむ夕がらす田ごとの稻城
こえ越えてとぶ

しぐれぐも往來ふみれば多幸太の峯のもみぢ
に松まじりたる

多幸太の黄葉に湧けるしぐれぐも前山へくだ
り人里に押しいづ

山かひは時雨の晴れてゆふさむし嶺のもみぢ
に空の澄むいろ

昭和八年

174

歳首有感

天がしたに國歩をたもつ時あやふし四方をい
ましめて年明けんとす

ひむがしに興らむ國をはばまむや紅毛の國ら
なにを謀議るぞも

天つ日の雲をやぶりて照るごとくすめらぎの
道を押して行へ

あさ日照る海ばらみれば神代より永久若くし
てこの國はありけめ

去年のごと禍津日あるなテロリズム世を暗う
するは國がらに恥づ

さがしかる世相にあへてきはねど去年も今
年も病めば嘆かゆ

立つ年と今朝しづかなる日かげさし病の床を
清しからしむ

冬朝病床盥漱

いたつきに老いゆくらむか口ひげに白鬚しろが生ひ
そめておとろへにける

ふゆ海の景色も窓によく見ねば顔あらひ了へ
てただに臥すなり

した濱の打ちたて牡蠣はうまけれど病みては
食の減りしこのごろ

まくら屏風かこひて病臥こる二階にはのぼる人
なくて家ぞしづめる

たまさかは炬燵によりて起きあがり咳きくる
いきをととのへにけり

四月十一日齋藤兄見訪

あ、お

この宵を海に音なく似、島に水氣をふふむ月上
りけり

あ

あづまよりはるか來給ひし君と居てこの三日
間は實にみじかし

病間消息雑歌

齋藤茂吉君に

老兄遠路の御見舞は實に謝するに辭なく
候。往年老兄長崎に病みし時故赤彦兄西
下せし事など思出して感慨催し候

言擧げぬ忝なさや君を見てわが病む心落着き
にけり

〇
君を泊めむ假家を狭み小夜更けて同じ濱べの
宿へ送りぬ

また百穂畫伯の「春の山」繪葉書も有難く往
時を切に追憶せしむるものあり端なくも
比叡山登行途中の景を思浮べ候。小生し
がらみに當時の「うぐひすの稚くこもりて
啼く山の芽吹かぬ谷を人寫すかも」の歌も
有之候まま

比叡山の白河みちに君と越えし春山に似れど
それに非ざる

下駄穿きて比叡山越えしこと思へば君は老い
つつわれや病みたる

愚庵和尚遺愛の狗子は誠に珍重々々俗工

匠の手彫却つて面貌形體に愛嬌ありて大いに宜しく候。

物さやぐ春に病むとき慰めて愚庵の狗子の奇しく來坐せる

枕べに木彫の狗はひと日居れ病のひまに手のべて撫づ

傳はれる木彫の狗子は愚庵和尚が撫でて艶づき生ける如しも

うち臥り終日みれば賜はりし木彫犬の顔人に似にけり

この狗子は木彫にあらずよく見れば其處に誰かに似て彫られける

等々興に乗じて出鱈目の歌久振りに書き
つらね申候。御笑覽被下度候。作歌も久
しく怠れば全く勝手を忘れたる心地いた
し候。誠に臆劫に候が仰せに従ひて時々
試み申すべく候

土屋文明君に

さもさと聞ゆる君が悪食は鬼子母神女のそ
れにもあらじ

この世にも報ゆるものぞ酒の餓鬼さけ飲めず
なりし吾を見給へ

饒舌妄語御ゆるし被下度候。呵々

牡丹の繪を賜はりたる人に

淡しくぞ葉色を畫くは朝の園の露をおびたる
白牡丹かも

白牡丹苞解けて蕾ふくれきりぬ手ぐさにとれ
ば珠の如くなる

白牡丹はしづかなれども咲かむとて蕾がしらの
張りきりて見ゆ

君が繪のいみじき筆の業みればいかでか人は
かく畫かざる

白牡丹蕾のさきの色ぐむは或ひは咲きて紅や
おぶらむ

鉢植の牡丹を贈られて折々に

逝く春は牡丹に寒し蒼しろくやうやく苞の解
けしこのごろ

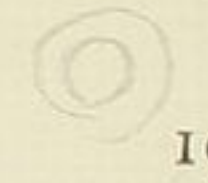
鉢の牡丹今年もたびて花咲けど病の癒えてみ
ねばかなしき

○ 散るときも牡丹の花は美しき一日のうち
に重りて散る

後夜の月

○ 夜半にして月いづるころを病む室にねむり覺
むるはあはれなりけり

多良川
十五



窓のそとは海よりのぼる後夜の月あたりの暗
き濱を照らしぬ

物ぐらく月照りいづる夜半よりぞとほき濱邊
にふくろ頻き啼く

消息の歌 (未定稿)

あかときに雨すこし降りてあがりたるは海邊
の梅雨のおくれてや降る

ふるさとの山がひの梅雨の肌さむさそれは思
へど家戀ひがてぬ

七月七日炎暑歸郷旅途

ふるさとへ歸る長路ながぢにいり行かむ山がうれし
も行く手にあをく

病むわれの見つつとほりし廣島の市いちのちまた
は夏さかりなる

○ かい道は家むらも畑もほこり浴びあつき樹々
より蟬鳴きにけり

眞夏野のかがやく遠方とちに雷鳴りて雲たむろせ
り可部かべのおく山

○ 自動車の道を追ふことはやし夕だちの過ぎし
ばかりの村をとほりぬ

○ ゆふ立のなごりが軒にしづくせる山かひの村
行くにしづけし

いきほひて濁りなみだつ峽の川なほ谿おくは
降り續げるらむ

山がはのしぶきをあぐる岸にしてそよげる合
歡は花いまだなり

われ久にとほらざりける舊縣道の峠の宿はす
たれけるかも

なづみのぼる上根かみねのさかの九折坂つづらをり自動車くるまにさ
やる樹の葉は折らず

ゆふだちは上根の嶺たをのうらおもて四五里やふ
りし道の濡れたる

青うらやま

日落つれば頓とみにしづまる山のかひ青さ身に染
むばかりに陰る

山おくへ蟬はしだいに鳴き退そきて宿驛うまやのうら
の山は日ぐるる

わが家やよりゆふ炊かぎするけむりたち青うら山
へなびきそめにし

食事しょくじにも力もちふれや椅子いすにより夕餉ゆふげのあと
の息をやすめぬ

慣るるには似れどもいらつ吾がやまひ三とせ
の夏のまた過ぎむとす

清夏歸居吟

七月はじめ海岸地より故山にかへる。
半年ぶりなり

山里はあはれふかくて竹のみぞおそき季節に
わか葉せりける

梅雨を経てくろずむ山にうぐひすのいまだ老
いぬをかへり來てきく

ふるさとに病む身かへりて心やすしあを田夏
山臥てゐても見ゆ

戸開くればほしいままなる朝ぎりはやまひの
床のうへを吹きすぐ

山の家は朝ぎりを吹く風さむく旅のきのふの
宿とことなる

つねは人の居ぬに馴れしかせきれいは部屋へぬ
 けてあゆむ恐れ氣もなく

せきれいは疊ふのうへをあゆみ來ぬ朝あぎりくら
 く部屋しづかなり

八月八日土屋文明兄來訪

○ みやこより遠き山里にかたじけなな臥ねながらに
 居て君をむかへぬ

途ながき汽車の暑さはさもあらばあれ比叡の
 つかれも持ちて來ましぬ

○ 張りきれる友の健康體はわれの見て先づたの
 もしき羨むよりは

出雲路へ明日は越ゆるかわが村に泊ることす
くなき君はをしめど

アララギ第八安居帳

それぞれの筆蹟あきつつましき安居帳一百人の歌
書かれたる

八月十五日盂蘭盆會

三年ぶりに盆の燈ひ捧あげむ墓まつりやまひの床
をいでて來にけり

いまもなほ墓處はのめぐりの桐の木はいく度か
伐れど立ちしげりたる

樹のかげに立ちならぶ墓は燈がともり香のけ
むりを静にあげぬ

ひとたびは整理めし墓處もつひにせまくいち
族五家の墓ぞならべる

としつきに忘るるものかはらからの五つの墓
をいまは傷まず

ゆふぐるる青葉のしたの墓どころきたり徘徊
りやすらぎをおもふ

ゆふ桐の木にゐて鳴くは蟬ならず髪きり蟲か
こゑしきり鳴く

夏日銷閑

再び愚庵和尚遺愛木彫狗子につきて消息
 す。小生木狗入手の當時その手澤のあと
 竝々ならぬを見て和尚生前愛撫のほどを
 察して何となく彼の梅尾明恵上人の狗子
 禮拜の故事上人亡父母を追慕する事深く
 幼時犬鳥を見ても若しや我が父母にても
 有らむかと嘆き敬ひしが或時思はず犬子
 を踏み越えければ驚き立歸りて拜みき思
 出でられ和尚一生の父母追慕の情のまた
 これと一味相通するものあるを覺えけれ
 ばひとり空想を恣にして遺愛の木狗をな
 でつつ

あはれみて見れば前世の生しやうやあらむ犬のなつ
 こさは人に似たりぬ

六道に亡き親戀へば犬をだにそれとあはれむ
 心おなじき

尋とめ得ざる親をなげきし人の手になでて光澤つや
 づきのこる木の犬

などと詠み居たる折しも神戸より西村俊一君下向しこの狗子を見て曰くこれ三寧の作にあらずや」とその奇遇に驚く。さらに同君歸後の詳報によれば三寧は京都清水産寧坂に住みし人。親が犬に助けられし因縁によりて犬のみ彫刻郷里自宅のものは三寧かつて樹齡百三十年餘の古楠を某寺に得て狗子凡そ十五體を彫りしうちの一體にして二十數年前父が友人より譲り受けしもの也」と。

和尚の最初愚庵を結びしは同じく産寧坂

佛弟子の愚庵の撫でし功德もて木の犬は生き
て人に化^なり出よ

なり。而してこの狗子にかかはる僧と俗とその親を思ふの情また常人に超ゆるところあり。既にかくの如くにしてこの狗子の作ありて斯くの如き人に撫せらる。又その因縁不思議とも申すべくして詠める歌

さんねいが結縁をして彫る犬のおのづと人に
顔似たりける

然るに歸宅してふと愚庵遺稿を繙きける
に「詠黄兒歌七首」あり。うち見ては露はに
明恵が父母輪廻生の嘆に同ずる跡方もな
ければ又三寧が彫狗の由來を知り給へる
素振だになし。されば前掲の歌はすべて
予の感傷空想の所作なるべしと雖も庵中
孤獨の起居には流石にその木狗を如何に

慰めとかし給ひけむ歌の面に見ゆれば尙
同工異曲の愚詠をつらぬ

眉ふとき愚庵を思へばすみ染のころもの膝に
犬をだきたる

ひとり居て君がむつびし木のいぬは生けるご
とくに今にのこりぬ

悼大村夫人

住む家をちかくせし日は背せのきみの使に立ち
てよく來ましける

子も持たで逝きたまふ人のたをやけき妻をあ
はれみて飽きがたからむ

九月四日颱風襲來して翌日につづく

○
病むわれに秋のおもひの有らしむる暴風雨あらしい
たりて夜もすがらなる

山ちかき雨をさそひて夜のあらし頻りにそと
のものを吹きおとす

昨夜よのあめに芭蕉はしるく暴あれにしが糸のご
とくにひろ葉やぶれし

なほ暴るる雲のゆききや蟬のこゑ今朝うら山
にひたと熄やみたる

吹きみだれ伏せる稻田の出穂でのうへに今朝も
はげしく降りあまる雨

朝虹は野分はげしき西の山にしばし立ちしが
雲吹き消ちぬ

あめ暴れし名ごりの今宵まづ蟲がひとつ鳴き
いづ芭蕉のもとに

病床雑吟

初秋の残暑いまだはげし

蒸氣吸入器かけつつをりて今朝もなほ庭にせ
はしき秋ぜみを聞く

庭にきて日照るころより鳴きたつる蟬をしき
けば夏去にがたし

いぶかしく煙草吸ふ欲のなくなりて吾が病む
咳のへりしこのごろ

中學生の生意氣どきに吸ひそめて廢めがたか
りし煙草やまりぬ

白露滴々芭蕉に花あり

芭蕉葉はのきに植ゑしが夜のあめにあり處し
らるる音いちじるし

朝ぎよめ待つ間も縁に吹くきりは芭蕉にしげ
き露をおとしぬ

大き芭蕉葉かげにふかく花持つか地に目立ち
てぞ苞をおとせる

葉ごもりに咲くと見えねど花芭蕉百日あまり
を散りつづきけり

秋といへど玉巻く芭蕉つぎつぎに暴風雨に破
れしあとにしげりぬ

秋霧いよいよ深し

朝ぎりの晴れ間のおそき秋となりセルの寝間
 着のやうやくさむし

潺々と小溝ながるれ崖したに咲きみだれたる
 コスモスの畑

このごろの朝の庭木にすずめ殖ゆ夏のあひだ
 は去りて居ざりし

庭すずめ聲あらそひてかまびすし朝ひととき
 は霧のはれざる

庭かげに木屋はそれとはな咲きてつめたき霧
 にかをりをはなつ

事につかれて小風邪あり

いささかも事さはりやすき吾がやまひ良しと
いへども癒えがたくある

小夜^{さよ}なかに露の滑りか降るあめか軒樋^{のきひ}に音の
つたはり初めし

目覺めたる夜半^{よな}にわびしき蚊のこゑの耳のあ
たりに來るをとらへぬ

山峽秋景

山ざとに秋を早目^{はやめ}に刈る稻はいまだもあをし
露しとどなる

雨あとはあさより日照れ川かみの山かひの霧
ながれ出づれど

秋のうつりとみに早きか昨日今日山のなりも
の齋もたらしつづく

今朝の秋になにを撃ちたる銃つおとか峽にとよ
みて音大きなる

悼平福百穂畫伯

十月二十四日付歸郷途次より汽車中の便
りあり

かなしみの旅の途とちゆう中も文ふみをしてわれの病をい
たはり給ふ

ふるさとおのれ死なむといささかも知りた
まはねば歸りたまひき

恐らくはこれが絶筆となるべきか賜ひし文を
伏せてうれひぬ

をさなきより父亡き君は兄ぎみを仰ぎたまひ
き死して殉しんがふ

床とこの間に妻が手向けし香ならむ君をなげけば
にほひ來りつ

わが家にかつてむかへて君を知る父ふ母はもきた
りてなみだ流せる

病むわれをねむると見らめ床のなかに君をな
げきて聲吞むときに

うたかたと命をいへどこの世より去らすべか
らぬ人を死なしぬ

病床矚目吟

ゆふぐれは軒に音やみ雨あがる露ぞあかるし
みぎりの紫苑しをんに

背戸せど庭は常のゆふべも掃くつちに蟲ぞ鳴くな
る鶏頭のした

花咲きてたふれしままの鶏頭ばな屋敷のみち
を人ゆき慣れぬ

人ゆかぬ庭のすみより鶏頭の立ちて朽ちしを
抜きて捨てしむ

素枯れたる紫苑のそばに鶏頭はいよいよ赤し
つゆ霜ふれど

中秋明月

満月は暮るる空より須臾に出てむかひの山を
照りてあかるし

高畑の家と木立のあはひより月あきらかに近
づきて出づ

照る月のななめに射せば塀のうちはなほ夕闇
の蔭おほき庭

裏山しぐれ

秋山に雨はるるとき木の間より熟れ田へいで
て鴉の啼きつ

あけがたに降りやむ雨は霧となり山をこめた
り川ちかきおと

山かひに霧吹きはらふ青ぞらは黄葉の嶺にか
かる朝月

うら山は照りてしぐるれ下田より手にとるこ
とき近き虹立つ

時雨かぜひくく吹くらし山岡やまをかの家のけむりの
這ひくだる見れば

雨いたく冬かみ鳴りのとどろくや今宵四方山よちやま
おち葉つくさむ

國土新に光る

臘月御生誕せまりて冬雷降雪その
吉兆あり

日の御子の天降り車のみ音かも冬かみなりの
轟くこれは

國ばらは雪ふりきよめ玉のごと降誕らす皇子
を待ちつつ申せ

十二月二十三日御降誕國土新に光を
はなつ

冬ぐもに青空現れてみづみづし貴のひかりは
照り出たまひぬ

くに民のねがひ切にして照るとき日繼の皇
子の天降らしめ給ふ

天あめがしたにつひに大きなる道を布しく國興おこらむ
としつつ今あり

生あれまして産衣うぶぎのうちに居たまへど國照てらす
べき日子ひこに坐すはや

この國は日繼ひつぎの皇子みこの定まりて天あめのしたなる
いや榮さかのくに

天地あめつちに祝ほぎまつらむと新玉の年も隣りに來つ
つさむらふ

初冬の庭

炬燵かどより暗しと思おもひて立ち出れば小雨ふりを
り庭をぬらして

冬庭を動くがゆるゑに目に見れど居り處のわか
ぬ鶺鴒ちひさし

山茶花

雨ふれば寒さうながすか鉢前の山茶花しろく
早咲ひとつ

秋さめの袖垣の樹にかたつむり子づれが五つ
きのふ居りにし

前栽に霧ながるれば朝あさを紅きさざんくわ
花ふえて見ゆ

山茶花はつぎつぎ紅き蒼もてり咲きをはるべ
きときの知らなく

霜しろく葉に置くあさは山茶花にくれなるの
露凍るべく見ゆ

村雨むらさめがあられとなりて暫時しばしふる庭はさざんく
わに花ゆたかなる

冬にいる庭かげにして山茶花さざんくわのはな動かして
ある小鳥あり

寄山茶花憶故平福百穂畫伯

さざんくわの咲きをはるべき冬にして君は吾
が家をすぎて宿やどりし

歐羅巴ヨーロッパの旅のかへりをこの家やにてまづ靴をぬ
ぎて和なぎし君かも

山茶花さざんかは時來て咲けどこのいへに君がふたたび來ます日の無し

臘月二十五日雪中出郷

ふるさとの雪ふる峽を出てくれば世の國はぬくし冬日照らせる

冬ぬくきみなみを戀ひて自動車くるまにて病む身をうつす吾が旅あはれ

道のべに湧井わきありければ薬服くすりむ水をもらひて車とどめき

昭和九年

歳旦雑感

世のくらし理屈めき來て正月のこと祝ぎぐさも手短にすむ

いにしへの民はともしも祝ぐ年を腹つづみうちて實じかたのしみき

季候にあはぬ曆こよみはかへる要なきか暗きみ冬に
新年をむかふ

病み臥せば吾あに正月のかかはりなく今日はき
のふの續きのごとし

病むわれに妻が屠蘇酒をもて來ればたまゆら
嬉し新年にして

新春の雪

南天の雪をかむれる赤き實みは風情ふうせいふるけれど
かへつて目出度し

庭木々の深雪ゆきのしたに咲きのこる紅山べにさん茶花さんくわは
あはれなりけれ

ふかぶかと庭木の雪を散らしつつ山小鳥ゐて
いろ美^{うつく}しき

雪降りてしづかになりし山の家はむしろ正月
めきて落ちつく

正月のぐわん日といへど日暮より只しづかな
り雪ふかき里

子どもらの年祝^{としほ}ぎあそび賑はひて雪ふる夜^{よる}の
更^ふけがたきかも

雪ふかき池をさわがすは何ならむ夜はふけし
づむ鯉^{こひ}跳^はねしより

窓 前

病む室の窓の枯木の櫻さへ枝つやづきて春は
せまりぬ

平福畫伯を悲しむ

吾が病癒えなばゆきて奥津城に居給ふ君をゆ
りてもおこさむ

悲しみが心に沁みて亡き君を夜々に夢みて寢
がたかりける

御遺族

父君を嘆きあふ子よさきはひは昨日にありて
今日に失ふ

文 獻

原據を見るを得ざりしものはアララギ轉載による

昭和三年（七十三首）

阿蘇山の歌

阿蘇山途上 五首 アララギ五月號

阿蘇大裾野 十一首 祖國四年一月號、一首三年八月阿蘇安居會歌會

詠草

草千里ヶ濱 七首

古坊中の道 二首

砂千里濱 八首 以上改造四年一月號

九月十九日冷雨ふる 五首 アララギ十月號
 日常吟(一) 五首 アララギ十一月號、題は年刊歌集第五による
 日常吟(二) 十首 (私題) アララギ四年一月號
 初冬の山家 十首 大阪朝日新聞四年一月(アララギ三月號轉載)
 山中の焚火 十首 サンデー毎日四年新年號
 昭和四年(六十二首)

紫宸殿 六首 (私題) アララギ二月號

銀閣寺 七首 二首アララギ二月號、五首文藝春秋二月號に「銀閣寺小景」として四首、義政公像として一首

浅春 二首 (私題) アララギ四月號

江波 二首 アララギ四月號

春山 五首 (私題) アララギ五月號
 弟の妻が死をあはれむ 二首 アララギ八月號
 梟 二首 (私題) アララギ八月號
 白田舎囑目 二首 アララギ八月號
 童馬山房即事 二首 アララギ八月號
 孟蘭盆 三首 アララギ九月號
 外祖母を迎ふ 五首 アララギ十月號
 秋日 四首 アララギ十一月號
 十一月八日在京冷雨いたく降る 五首 アララギ十二月號
 初冬 五首 (私題) アララギ五年一月號
 女龜山 五首 大阪毎日新聞五年一月十四日

冬山の牛 五首 大阪朝日新聞(アララギ五年五月號轉載)
昭和五年(百四十八首)

海邊巖 一首 大阪毎日一月廣島版(アララギ五月號轉載)

病床漫詠 十首 アララギ二月號

平福畫伯渡歐送別 一首 アララギ二月號

加納曉君を悼む 六首 五首アララギ三月號、一首五月十一日大阪追悼

歌會詠草

春雜詠 九首 四首アララギ四月號、五首五月號

山村の春日 十四首 改造五月號

植田即事 十二首 アララギ七月號

梅雨 五首(私題)アララギ八月號

大原夫人追悼 二首 六月三十日追悼歌會詠草

帝釋峽 三首 サンデー毎日(アララギ十月號轉載)

佛法僧鳥 十首 大阪朝日新聞九月五日

高野山眞別處 十七首 七首改造六年一月號、十首アララギ六年一月號

飛鳥 二十一首(私題) 七首アララギ九月號、九首アララギ十月號、五首

アララギ十一月號

初冬 五首 アララギ十二月號、題は年刊歌集第七による

液雨ひさしきに倦みて 十首 アララギ六年二月號

夢殿祕佛 七首 夢殿第二號

熟荒 十首 新聞聯盟一月(アララギ六年二月號轉載)

山村の地震 五首 大阪朝日新聞六年一月十五日「地震のあと」、題はア

アラギ六年二月號の轉載による

昭和六年（八十七首）

童馬山房 四首（私題）アララギ三月號

春嵐 二首（私題）アララギ四月號

早春雜詠 五首 文藝春秋三月號

春庭 三首（私題）アララギ五月號

三次櫻景三趣 十首 大阪朝日新聞四月十九日

この日ごろ 三首 二首アララギ六月號、一首七月號

喜雨 二首 アララギ七月號

病間遺愁 十首 アララギ十月號

舊盆の月 二首（私題）アララギ九月號

月夜吟 三首 改造十月號

芭蕉の月 五首 大阪朝日新聞九月十六日

秋となりて 三首 アララギ十一月號

赤彦を憶ふ 三首（私題）アララギ十二月號

秋の山田 十首 アララギ七年一月號

稻田の霧 十二首 七首サンデー毎日七年新年號、五首アララギ七年二

月號

庭の寒月 五首 短歌春秋七年一月號

冬の鶴鶴 五首 長崎新聞七年一月

昭和七年（二十五首）

曉雞聲 二首 大阪朝日新聞一月一日

しばし五日市に住みて 五首 三首アララギ三月號、二首四月號、題は年

刊歌集第九による

牡丹 一首 (私題) アララギ五月號

松蟬 三首 (私題) アララギ六月號

水鶏 三首 (私題) アララギ七月號

病床秋雨 五首 短歌研究八年一月號

しぐれ黄葉 六首 改造八年一月號

昭和八年 (百五十五首)

歳首有感 七首 中央公論新年號

冬朝病床盪漱 五首 アララギ七月號

四月十一日齋藤兄見訪 二首 アララギ五月號

病間消息雜歌 十九首 アララギ六月號

後夜の月 三首 (私題) アララギ六月號

消息の歌 二首 アララギ七月號

七月七日炎暑歸郷旅途 十一首 アララギ八月號

青うらやま 五首 (私題) アララギ九月號

清夏歸居吟 七首 短歌研究十二月號

八月八日土屋文明兄來訪 四首

アララギ第八安居帳 一首

八月十五日盃蘭盆會 七首

夏日銷閑 七首

悼大村夫人 二首 以上アララギ九月號

九月四日颱風襲來して翌日につづく 七首 アララギ十月號

病床雜吟 十七首 アララギ十一月號

山峽秋景 四首 (私題) アララギ十二月號

悼平福百穂畫伯 八首 アララギ十二月號

病床矚目吟 五首

中秋明月 三首

裏山しぐれ 六首 以上アララギ九年一月號

國土新に光る 八首 大阪毎日新聞十二月二十四日

初冬の庭 二首 國民新聞(八年十二月五日作掲載日附不明)

山茶花 七首

寄山茶花憶故平福百穂畫伯 三首 以上大阪毎日新聞九年一月三日

臘月二十五日雪中出郷 三首 アララギ九年二月號
昭和九年 (十六首)

歳旦雜感 五首 短歌新聞一月號

新春の雪 七首 大阪朝日新聞一月一日

窓前 一首 (私題) アララギ三月號

平福畫伯を悲しむ 三首 アララギ四月號

以上五百六十六首

編輯後記

編輯のことは序に盡されてあるが、歌の題は著者の題として選ばれたものは寧ろ少く、詞書の程度のものをも止むを得ずそのまま題としておいた。その他新に附した分は文獻に私題と注した如くであるが、之は岡田眞君が多く撰ばれたものである。

扉の「輕雷集以後」の文字は中島周介氏の歌を書き抜いた帳の表紙に著者自ら「輕雷集以後之歌」と記されてあつたものを用ゐた。

装幀に用ゐた平福畫伯の作は大正二年无聲會出品畫を著者が入手したもので、その由來は著者の畫伯追悼文「百穂畫伯の事ども」アララギ第二十七

卷第四號平福百穂追悼號所載に詳であるが、思出深いもの故縮寫して用ゐたのである。今度の印刷装幀製本其他出版一切のことは主として岩波書店の佐藤佐太郎氏の盡力によつたものである。ただ私の不行届の所多く御遺族よりの依囑に十分に添ひ得ぬ點が多々あらうと思はれるのを遺憾に思ふ次第である。(土屋文明記)

(寺島製木)

昭和九年十一月十五日印 刷
昭和九年十一月二十日第一刷發行

輕雷集以後
定價壹圓八拾錢



| | |
|-----|--------------------------|
| 著者 | 中村憲吉 |
| 發行者 | 東京市神田區一ツ橋通町三番地 岩波茂雄 |
| 印刷者 | 東京市神田區錦町三丁目十七番地 白井赫太郎 |

精興社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話(33) 八八七番
九段(33) 〇八八番
振替口座東京二六二四〇番

書叢ギララア

| | | | |
|---------------------------------|----|----------------------|-------------------|
| ア ラ ラ ギ 同 人 編 | 44 | アララギ年刊歌集 第五 (昭三年度) | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 |
| 土屋文明著 | 43 | 歌往還集 | 岩波書店發行 定價一圓八十錢 |
| 齋藤茂吉・中村憲吉・土屋文明同校 | 42 | 訂増左千夫歌集 | 岩波書店發行 定價三圓五十錢 |
| 伊藤左千夫遺著 | 42 | 左千夫歌論集 (卷三) | 岩波書店發行 定價四圓 |
| 伊藤左千夫遺著 | 42 | 左千夫歌論集 (卷二) | 岩波書店發行 定價四圓三十錢 |
| 伊藤左千夫遺著 | 42 | 左千夫歌論集 (卷一) | 岩波書店發行 定價四圓 |
| アララギ同人編 | 41 | アララギ年刊歌集 第四 (昭二年度) | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 |
| 齋藤茂吉著 | 40 | 短歌寫生の說 | 鐵塔書院發行 定價一圓七十錢 |
| 高田浪吉著 | 39 | 集歌川波 | 古今書院發行 定價二圓三十錢 |
| 結城哀草果著 | 38 | 集歌山麓 | 岩波書店發行 定價二圓三十錢 |
| アララギ同人編 | 37 | アララギ年刊歌集 第三 (大正十五年) | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 |
| 中村憲吉著 | 36 | 集歌輕雷集 | 古今書院發行 定價二圓 |
| 岡麓著 | 35 | 集歌代々木雜筆近刊 | |
| 發行所編 | 34 | 故人歌集 (第三) 近刊 | |
| アララギ同人編 | 33 | アララギ年刊歌集 第二 (大正十四年度) | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 |
| 島木赤彦著 | 32 | 集歌梯陰集 | 岩波書店發行 定價二圓 |
| 藤澤古實著 | 31 | 集歌國原竹 | 岩波書店發行 定價二圓六十錢 |
| 平福百穂著 | 30 | 集歌寒竹 | 古今書院發行 定價二圓二十錢 |
| 門間春雄著 | 29 | 門間春雄歌集 | 岩波書店發行 定價一圓八十錢 |
| 齋藤茂吉著 | 28 | 童牛漫語近刊 | |
| 齋藤茂吉著 | 27 | 良寛和歌集私鈔近刊 | |
| 齋藤茂吉著 | 26 | 金槐集私鈔 | 春陽堂發行 定價三圓八十錢 |
| 齋藤茂吉著 | 25 | 集歌つゆじも近刊 | |
| 發行所編 | 24 | 故人歌集 (第一) 近刊 | |

書叢ギララア

| | | | |
|------------------|----|---------------------|-------------------|
| アララギ同人編 | 44 | アララギ年刊歌集 第五 (昭三年度) | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 |
| 土屋文明著 | 43 | 歌往還集 | 岩波書店發行 定價一圓八十錢 |
| 齋藤茂吉・中村憲吉・土屋文明同校 | 42 | 訂増左千夫歌集 | 岩波書店發行 定價三圓五十錢 |
| 伊藤左千夫遺著 | 42 | 左千夫歌論集 (卷三) | 岩波書店發行 定價四圓 |
| 伊藤左千夫遺著 | 42 | 左千夫歌論集 (卷二) | 岩波書店發行 定價四圓三十錢 |
| 伊藤左千夫遺著 | 42 | 左千夫歌論集 (卷一) | 岩波書店發行 定價四圓 |
| アララギ同人編 | 41 | アララギ年刊歌集 第四 (昭二年度) | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 |
| 齋藤茂吉著 | 40 | 短歌寫生の說 | 鐵塔書院發行 定價一圓七十錢 |
| 高田浪吉著 | 39 | 集歌川波 | 古今書院發行 定價二圓三十錢 |
| 結城哀草果著 | 38 | 集歌山麓 | 岩波書店發行 定價二圓三十錢 |
| アララギ同人編 | 37 | アララギ年刊歌集 第三 (大正十五年) | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 |
| 中村憲吉著 | 36 | 集歌輕雷集 | 古今書院發行 定價二圓 |

書叢ギララア

| | | | | | | | | | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|---------------------------------|--------------------|---------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------------------------------|-------------------|
| 竹尾忠吉著 45 集歌八 | 高田浪吉著 46 作歌餘錄 | 齋藤茂吉著 47 集珠 | アララギ同人編 48 アララギ年刊歌集第六(昭和四年度) | 加納 曉著 49 加納 曉歌集 | 齋藤茂吉著 50 短歌初學門近刊 | 今井邦子著 51 集紫 | 築地藤子著 52 集椰子の葉 | 森山汀川著 53 集峠路 | 久保田不二子著 54 集苔桃 | アララギ同人編 55 アララギ年刊歌集第七(昭和五年度) | 高田浪吉著 56 集砂濱 |
| 古今書院發行 定價一圓六十錢 | 古今書院發行 定價一圓六十錢 | 鐵塔書院發行 定價一圓五十錢 | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 | 古今書院發行 定價二圓二十錢 | 岩波書店發行 定價二圓三十錢 | 岩波書店發行 定價二圓三十錢 | 岩波書店發行 定價二圓二十錢 | 古今書院發行 定價二圓二十錢 | 岩波書店發行 定價二圓二十錢 | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 |

書叢ギララア

| | | | | | | | |
|---------------------------------|----------------------|---------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------------------------------|--------------------|
| アララギ同人編 57 アララギ年刊歌集第八(昭和六年度) | 白水吉次郎著 58 白水吉次郎歌集 | 高田浪吉著 59 現代短歌の鑑賞 | 今井邦子著 60 集草 | 土田耕平著 61 集斑雪 | 竹尾忠吉著 62 集路 | アララギ同人編 63 アララギ年刊歌集第九(昭和七年度) | 中村憲吉著 64 集輕雷集以後 |
| 岩波書店發行 定價一圓五十錢 | 古今書院發行 定價一圓五十錢 | 古今書院發行 定價一圓五十錢 | 古今書院發行 定價一圓八十錢 | 古今書院發行 定價一圓五十錢 | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 | 岩波書店發行 定價一圓五十錢 | 岩波書店發行 定價一圓八十錢 |

目書句俳歌詩行刊店書波岩

| | | | | | |
|-------------------|-----|----|----|------|-----|
| 幸田露伴著 | 冬 | の | 日 | 抄 | 二・三 |
| 幸田露伴著 | 春 | の | 日 | 曠野抄 | 二・五 |
| 幸田露伴著 | ひ | さ | ご | 猿蓑抄 | 二・二 |
| 幸田露伴著 | 炭 | 俵 | 續 | 猿蓑抄 | 二・五 |
| 勝峯晋風著 | 芭蕉 | 七部 | 集 | 定本 | 二・八 |
| 沼波瓊音校訂 | 芭蕉 | 蕉 | 全 | 集 | 四・三 |
| 小宮豐隆著 | 芭蕉 | の | 研 | 究 | 三・三 |
| 太田水穂著 | 芭蕉 | 俳諧 | の | 根本問題 | 二・二 |
| 太田水穂著 | 芭蕉 | 連句 | の | 根本解説 | 四・三 |
| 勝峯晋風解説 | 去來本 | 奥 | の | 細道 | 四・一 |
| 荻原井泉水著 | 奥 | の | 細道 | 評論 | 二・二 |
| 沼波、太田、幸田、安倍、小宮、和辻 | 芭蕉 | 俳句 | 研 | 究 | 二・五 |

目書句俳歌詩行刊店書波岩

| | | | | | |
|-----------------------|------|----|----|----|-----|
| 幸田、太田、沼波、安倍、小宮、勝峯、和辻著 | 續 | 芭蕉 | 俳句 | 研究 | 二・二 |
| 幸田、太田、沼波、安倍、小宮、勝峯、和辻著 | 續 | 々 | 芭蕉 | 俳句 | 研究 |
| 山田、小宮、土居、岡崎著 | 芭蕉 | 俳諧 | 研 | 究 | 二・二 |
| 山田、小宮、土居、岡崎著 | 芭蕉 | 俳諧 | 研 | 究 | 二・二 |
| 山田、小宮、土居、岡崎著 | 芭蕉 | 俳諧 | 研 | 究 | 二・二 |
| 山田、小宮、土居、岡崎著 | 新 | 續 | 芭蕉 | 俳諧 | 研究 |
| 山田、小宮、土居、岡崎著 | 遺稿 | 父 | の | 終焉 | 日記 |
| 荻原井泉水校訂 | 一案 | し | だ | ら | 〇・九 |
| 佐佐木信綱解説 | 藤原定家 | 所傳 | 金 | 槐 | 和歌集 |
| 井手今滋編 | 橘 | 曙 | 覽 | 全 | 集 |
| 大島花束編著 | 良 | 寛 | 全 | 集 | 五・五 |
| 大島花束校註 | 註校 | 良 | 寛 | 歌 | 集 |

目書句俳歌詩行刊店書波岩

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------------|-------------|------------------------------|------------|---------------|------------|--------------|------------|----------------|------------|------------------|------------|----------------------------|-----------|----------------------------|-----------|----------------------------|------------|--|------------|--|------------|--|------------|
| 西原柳雨著 風誹柳多留講義 (初篇) | 一・一五 一五〇 | 島木赤彦著 萬葉集の鑑賞及び其批評 (前編) | 二・二〇 一〇 | 島木赤彦著 歌道小見 | 一・二五 一〇 | 太田水穂著 歌立言 | 二・二二 一〇 | 土屋文明編 萬葉集年表 | 三・三八 三〇 | 佐佐木信綱編著 分類萬葉集 | 四・三五 三〇 | 萬葉三水會編 萬葉集研究年報 (第一輯) | 〇・七 四〇 | 萬葉三水會編 萬葉集研究年報 (第二輯) | 〇・九 六〇 | 萬葉三水會編 萬葉集研究年報 (第三輯) | 一・〇〇 八〇 | 伊藤左千夫遺著 齋藤茂吉・土屋文明校訂 左千夫歌論集 (卷一) | 四・三〇 三〇 | 伊藤左千夫遺著 齋藤茂吉・土屋文明校訂 左千夫歌論集 (卷二) | 四・三三 三〇 | 伊藤左千夫遺著 齋藤茂吉・土屋文明校訂 左千夫歌論集 (卷三) | 四・三〇 三〇 |
|--------------------------|-------------|------------------------------|------------|---------------|------------|--------------|------------|----------------|------------|------------------|------------|----------------------------|-----------|----------------------------|-----------|----------------------------|------------|--|------------|--|------------|--|------------|

目書句俳歌詩行刊店書波岩

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|------------|-----------------|------------|---------------|------------|--------------|------------|-----------------|------------|--------------|------------|---------------|------------|----------------|------------|-----------------|------------|----------------|------------|----------------|------------|---------------------|------------|
| 久保田不二子著 集歌苔 | 二・二二 一〇 | 築地藤子著 集歌椰子の葉 | 二・三〇 一〇 | 今井邦子著 集歌紫草 | 二・三三 一〇 | 高田浪吉著 集歌濱 | 一・一五 五〇 | 門間春雄著 門間春雄歌集 | 一・一八 五〇 | 藤澤古實著 集歌原 | 二・二六 一〇 | 結城哀草果著 集歌麓 | 二・二三 一〇 | 土屋文明著 集歌往還集 | 一・二八 一〇 | 中村憲吉著 集歌しがらみ | 一・二八 一〇 | 島木赤彦著 集歌柿蔭集 | 二・二〇 一〇 | 島木赤彦著 集歌氷魚集 | 二・二五 一〇 | 中齋藤村文憲明同校訂 左千夫歌集 | 三・三五 三〇 |
|----------------|------------|-----------------|------------|---------------|------------|--------------|------------|-----------------|------------|--------------|------------|---------------|------------|----------------|------------|-----------------|------------|----------------|------------|----------------|------------|---------------------|------------|

目書句俳歌詩行刊店書波岩

| | | |
|---------|---------------------|------|
| 島木赤彦編 | アララギ年刊歌集第一(大正十三年度) | 一・五〇 |
| アララギ同人編 | アララギ年刊歌集第二(大正十四年度) | 一・五〇 |
| アララギ同人編 | アララギ年刊歌集第三(大正十五年度) | 一・五〇 |
| アララギ同人編 | アララギ年刊歌集第四(昭和二年度) | 一・五〇 |
| アララギ同人編 | アララギ年刊歌集第五(昭和三年度) | 一・五〇 |
| アララギ同人編 | アララギ年刊歌集第六(昭和三十四年度) | 一・五〇 |
| アララギ同人編 | アララギ年刊歌集第七(昭和三十五年度) | 一・五〇 |
| アララギ同人編 | アララギ年刊歌集第八(昭和三十六年度) | 一・五〇 |
| アララギ同人編 | アララギ年刊歌集第九(昭和三十七年度) | 一・五〇 |
| 茅野雅子著 | 歌集 | 品切 |
| 木下利玄著 | 木下利玄全集 | 二・八〇 |
| 正岡子規筆 | 仰臥漫錄(木版手摺 原本複製) | 品切 |

目書句俳歌詩行刊店書波岩

| | | | |
|---------|-----------------|-----|------|
| 夏目漱石著 | 詩話漱石詩集 | 附印譜 | 品切 |
| 夏目漱石著 | 詩話木屑錄(玻璃版 原本複製) | | 六・五〇 |
| 夏目漱石著 | 漱石俳句集 | | 一・五〇 |
| 寺田實郎著 | 漱石俳句研究 | | 二・二〇 |
| 小宮豊隆著 | 五城句集 | 附短歌 | 一・五〇 |
| 數藤五城著 | 五城句集 | | 一・五〇 |
| 芥川龍之介遺稿 | 澄江堂遺珠 | | 二・二〇 |
| 佐藤春夫編 | 江堂遺珠 | | 一・二〇 |
| 島田忠夫著 | 童謡詩柴木集 | | 一・七五 |
| 竹尾忠吉著 | 童謡詩柴木集 | | 一・五〇 |
| 太田水穂著 | 歌鷺 | | 二・〇〇 |
| 齋藤茂吉著 | 柿本人麿 | | 三・五〇 |
| 校本萬葉集 | (全十卷) | | 完結 |
| 赤彦全集 | (全八卷) | | 完結 |

3

Handwritten notes and a red circular stamp on the bottom left of the left page.

Faintly visible table structure on the right page, possibly containing data or a list.

町屋西
店書部黒
番四〇三話



百穂
